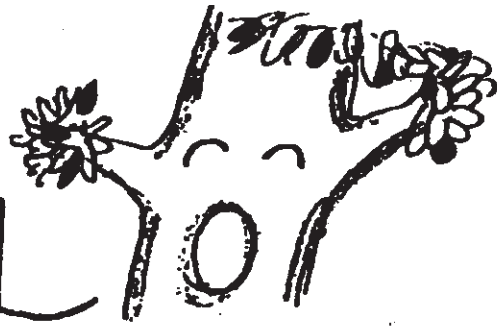


関西 第42号

ECOMAIL 10



関西 ECOMAIL

関西支部会員のみなさまに、ワークショップのお知らせや環境教育に関わる情報の交換をしていただくために発行しています。

また、学会員以外の方々に、環境教育に関心をもっておられる方や実践をされている方とのコミュニケーションを広く図りたいと思っています。

日本環境教育学会会員のみなさまには支部会費、会員でない方には購読費として、年間1500円をいただきましたら、ワークショップの案内とこの関西 ECOMAILを送らせていただきます。

(通信費振り込み先: 日本環境教育学会 関西支部 郵便振替口座

00990-5-37886)

日本環境教育学会 第9回大会(大阪)の御案内

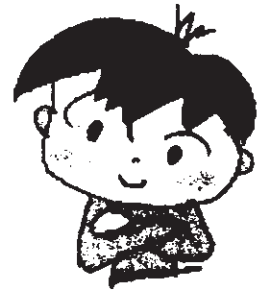
1998年5月22日(金)～5月24日(日) 大阪教育大学柏原キャンパスにて開催されます。プログラム等、詳細は8ページをご参照ください。

第64回 ワークショップのお知らせ

- テーマ: 「兵庫県の自然学校制度について」
- 日時: 1998年1月24日(土) 14:30～16:30
- 場所: 大阪府立 青少年会館 第6会議室
- (JR森ノ宮駅から徒歩で西に500メートル 日生球場越えてスグ)
- 話題提供: 戸田耿介(兵庫県立 人と自然の博物館)

第42号 目次

- ◆ 日本環境教育学会 関西支部第6回研究大会 まとめ
「CUPからCOPへ・道は開かれたか」(赤尾豊志) ...2
- ◆ 第60回 関西ワークショップ(11/29) 報告
「シンポジウム『よみがえれ! フェニックス土居川』を終えて」(福島 古) ...5
- ◆ 第63回 関西ワークショップ(12/13) 報告
(生き生き地球館見学・田代智恵子) ...6
- ◆ ネットワーク ...7～8



日本環境教育学会関西支部第6回研究大会（まとめ）

……CUPからCOPへ・道はひらかれたか？……

赤尾整志（関西支部長）

第6回研究大会は、これまでの大会と少し違った時空間での開催となった。例年の（12月）より繰り上げて11月22日に、場所も今日まで関西支部の拠点基地となってきた大阪教育大学天王寺学舎にもどって行われた。

◇一般講演

今大会では10題の研究が午前中、2会場で発表された。そのほとんどは学校教育における環境教育の研究と実践報告であった。その内容については、発表要旨を参照されたい。なおこの一般講演の最後に、1998年に開催予定の日本環境教育学会第9回大会（大阪）特別集会の企画に向けて、関西支部大会実行委員会の福島さんから「環境教育学」の提案があり、議論を呼んだ。

◇第3回関西支部総会

1996年度の事業と会計について、支部大会事務局長の植田さん及び担当者から報告があった。詳しくは総会資料を参照されたい。

※関西支部の会計年度は5月締め切り、総会が12月のため、1997年度の会計報告は1998年度の総会で行うことになっている。

◇特別講演

日本野外生活推進協会代表の高見 豊さんのご紹介で、スウェーデン野外生活推進協会のスティーナ・ヨハンソンさんが来日しているのを機会に、「スウェーデンにおける環境教育」と題してお話をいただいた。同協会の日本における実践と事業の紹介はすでに関西支部の第56回ワークショップで学習したが、今回は特別講演としてスウェーデンにおける環境教育の現状について直接に話を聞くことができた。

子どもたちを自然の中に導いて、体験を通して学ぶ環境教育のやり方については、スウェーデンも日本も大差のないことが分かった。ただ特に「持続可能な社会を築くための環境教育は、早めに生活態度を変えさせる」という幼児教育が徹底しているようである。また全国すべての地方自治体の環境対策が、1992年の地球サミットで採択されたアジェンダ21の精神をベースに進められている。学校教育では、それぞれの学校の運営はスウェーデンでは独立して行われているので、各学校の環境教育も教師の主体性によって進められ、同協会がそれをフォローするのに一役かっているようである。この点に関しては、文部省主導でないとなら進まない日本の環境教育の進め方や、学校・教師のあり方にも学ぶべきところがある。

この講演に対して、つぎのような聞き手からの意見・感想があった。（以下はワークショップの場で発言されたもので、その要約である）

「日本の文部省が出す中教審答申などは、かえって学校現場を混乱させている。話を聞いて分かったが、各地方自治体がイニシアティブをとってカリキュラムづくりをするスウェーデンのような環境教育の進め方に近づくためには、日本の現状では教育者が自身で動き出す（運動）より他にない」「吹田市では教育委員会が現場の教師と一緒に副読本をつくり、主体的に校内で活用している。地域におけるフィールドの学習などから、環境の基本知識－循環など－をよく理解させるのは大切なことだ」「“ムッレ教室”のムッレは土壌の意味。日本の現代都市には土などないというが、1鉢の木からでもムッレは学べる。要は木と土ではなく、木と土の関係を学ぶことだ。それは人との関係にもつながってくる。つながりの場を感じ取ることが大切。そのような見方をすればコップ1杯の水でも、自分、そして何億年もの地球の歴史とのつながりを分らせることができるのではないか。」

◇特別ワークショップ

「COP3を知ろう－環境教育はどうかかわるべきか－」というテーマで、タイミングとしては遅すぎた感じだが、多忙な中で面倒をみてくださった“気候フォーラム”の山本幹彦さん（本学会会員）、山口洋典さん（立命館大学）、地元京都でこども環境サミットを行った栗田小学校の森江里子さんからの語る一語一語が、そのまま聞く者に多くの「気づき」を与えてくれた。

最初に栗田小学校における環境学習のスライド映写による紹介があった。その後、コーディネーターの鈴木善次さん（大阪教育大学）のリードにより、3人のコメンテーターの間で「環境学習はこの機会だけでなく、日常的にやってはじめて身についていくものだ」、それでも「これ（京都会議）を契機に学校が変わり、教育の劇的な変化を期待する」、事実「学習で成長した子に教えられた親の気づきが、地域のライフスタイルに定着しつつある」など、意見のやりとりが行われた。

つづいて山本さんからは、次のようなコメント（筆者要約）があった。

- ①COP3の議定書採択と実行には教育の力が欠かせない。気候フォーラムは昨年12月に全国環境NGOのネットワークとして立ちあげられたが、環境教育学会ではそれから誰がどのように応じてきただろうか。
- ②ライフスタイルの変革も環境教育の関わり方であるが、今はCOP3の目標を「京都で決めよう！」という時。環境教育もその大きな「うねり」の中で、「教育で決めるのだ」という目標をもつことが重要である。
- ③COP1・2を通して国と国の合意の難しさ（南北間の不公平）、この事実を皆が共有しないと前進はないのに、その実態は子どもたちにも伝えられていない。せめて京都だけでも、子ども環境サミットをやった。どんな構図の中でのライフスタイルなのかは、環境教育がおさえておかねばならない問題点ではなかろうか。
- ④これからはCOP3をうけて、「減」のライフスタイルを誰がいかにつなげるか。それには民主主義的なアプローチが大切だ。

このような山本さんのコメントをうけて、コーディネーターの鈴木さんより「先日、読売新聞社から、日本環境教育学会としてどんな取り組みをしているか問われた。それに応えるにも、またCOP3を成功させるためにも、会員として何をなすべきかより具体的な取り組み方を確認したい」という要望がだされた。そこでパトタッチされた気候フォーラムの山口さんから、以下のようにCOP3を成功させるための経緯の説明と呼びかけがあった。

⑤COP3に対する目標、議定書の1997年採択を目差して日本の環境NGOである気候フォーラムは、アンブレラ組織によって国連会議の場にも市民の声を届けている。(ロビング)

⑥COP3のアクションには次の2タイプがある。ダイナミック型(直接的)：個人・団体にはたらきかけて積極的に組織化し、圧力をかける。遠隔地同志でも電子メディアを活用する。アカデミック型(間接的)：学習会や交流会、学校内学校外での既存の講座を発展させる。情報による「知」の交流をする。

⑦環境問題へのアクションの第一は、すべての人々(無関心な人も)に自ら主体たることを気づかせること。そのためには学校の外に出て学ぶことが必要だ。COP3はその「きっかけ」となる。

⑧COP3を通して“グローカリゼーション”を。

以上のような3人のコメントのあと、会場からはワリバシやハイブリッド車の話題から公平性をめぐる問題意識のもち方「地球市民として判断することのできる市民になること」、効率主義の企業原理に家庭(父親は働き蜂)も学校(点数による評価)もはまり込んでしまっている現在の教育のあり方の見直しが必要。といった声がかれた。

最後に甲南大学の谷口さんより、森さんに今後も継続的にCOP3の精神で実践を。山本さんには、「10の主張」に対する難しさは教育の主体的な関わり方の弱さであり、それはそのまま教育の政治的力量的弱さでもあると。また山口さんへは「気づかせる」ことと「気づく」ことの価値意識の違い。など感想がのべられた。

※気候フォーラム10の主張(要点のみ)

1. 条約・議定書：1990年のレベルから20%削減義務付け
2. 日本市民の自覚と行動：過剰消費と過剰廃棄の改心
3. エネルギー政策：CO²、4%削減へ政策転換
4. 運輸：化石燃料大量消費システムの見直しと中止
5. まちづくり：資源大量消費型ハード優先の見直しと転換
6. 税財政改革：根本的見直し、環境税の導入
7. 企業：CO²排出割合を自覚し4%削減、環境情報開示
8. 生態系・農林水産業：生物多様性尊重、原生林伐採抑制、環境保全型へ転換
9. 南北問題：南北の不公平是正、北の責任と南への移転自粛
10. 市民参加・情報公開：自治体レベルの積極的な取り組み

シンポジウム「よみがえれ！フェニックス土居川」を終えて

福島 古（シンポジウム実行委員・日本環境教育学会関西支部）

作家藤本義一氏の講演「人間再発見—人間を考える」では、氏自身の震災体験の中から「避難所での人間模様」をユーモアたっぷりに話された。また、右脳と左脳の話とそれに続く男と女のしぐさの違いの話に会場は大爆笑となってしまった。最後はシンポジウムで「脳を使おう」という所に着地されたのは流石だと感心することしきりであった。

続いて、小田、木津川、田丸、広松の四氏をパネリストに迎えてのディスカッションである。実行委員会の意図としては、河川浄化の可能性やコストについて専門家の意見を聞き、文化面から堺市の歴史を再認識し、そして実践面からは、進んだ事例から余す所なく学び、成功の教訓を堺市に適用しようではないかと、いささか欲張ったことを考えていたわけである。でも、忙しい中、参加された方からの感想用紙には、私たちの意に概ね賛同して頂いた旨の文章がぎっしりと書かれてあったのを見て、この一年間シンポジウムにむけて企画・広報活動をしてきた者の一人として感慨無量といった所である。賛助団体となって頂いた、関西支部ならびに会員の皆様に感謝の意を表したいと思います。

実行委員会の打ち上げ会では、当日のVTRを見ながら環境教育的な視点がディスカッションの中で鮮明化できていただろうかという点に於いて司会者としてもいささか考えさせられてしまった。しかし、河川問題そのものが環境教育的で文明問題であるのだし、それを考える過程こそが環境教育の命題である「全体として考える」ことの実証でもあるのだと思える。なによりも、そのことはパネリストの発言の多様性と実行的・行動的かつ意識変革に迫る内容によって証明されたのではないかと気を取り直しているこの頃である。広松氏の「都市において、川は血管であり、水は血液である」とは名言である。この言葉は何と多くの環境教育的な視点を含んでいることだろうか。環境保全だとか環境復元だとか、ややもすると技術的視点が先行した論議の中にあって河川のもつ自然性とでも言うのだろうか、河川の存在そのものが本来的にも環境なのであるとの言葉にはアピール力がある。このような「言葉」に出会って環境教育とは何かと言う根本的命題を再認識させられたことだけは事実である。もう一つ、パートナーシップと言う言葉は大流行ではあるがいまひとつ実体がない。昨今の、住民とのヒアリング「行為」をもって住民参加と考えると何事であるか。こんなことだから、欧州のように都市開発に関して市民サイドの規制がかからず環境悪化をもたらすのだなどとパネラーの方々の発言を思い起こしている。

第63回ワークショップ 「大阪市における環境教育のとりくみ」

1997年12月13日（土） 大阪市立環境学習センター「生き生き地球館」にて

田代智恵子（大阪市職員）

「生き生き地球館」は、1990年「花の万博」が開かれた鶴見緑地に1997年4月30日、オープンしたが、オープン直前に予定されていた内覧会がお流れになり、年内に一度、この施設を見学したいという声があった。また、区役所で市民への情報提供や広報に携わる私としても、自分の勤める大阪市が環境教育についてどのようなとりくみをしているか知っておきたかった。そこで、このワークショップが企画された次第である。

まず、施設の見学。地下鉄の駅から近い所であり、入場が無料（後述のアースモニターシップのみ有料）なので、「敷居」は低いと思った。地球規模の環境問題もさることながら、大阪の身近な自然に関係する展示が多い。家庭の居間や台所などの実物大の模型のあるライフスタイルコーナーや、NGOの資料を置いているコーナーなどもある。2階の図書室には大阪市の環境情報や多種多様な資料があり、飽きが来ない（貸出をしてくれたら、もっとありがたいのだが…）。館内で私が一番不思議に思ったのは、別館に展示していた昆虫で活動していたのがあったことだ。初冬である。一体どうなっているのだろう。常に、活動している昆虫が展示してあるのだろうか？

次に、「アースモニターシップ」に入った。時間空間を移動できる宇宙船に乗って地球を見つめ、今起こっている環境問題を理解しようという、「疑似体験コーナー」である。座席の傍らにはタッチパネルがあり、テーマの選択や時折出される択一式の問題に答えるときに使われる。音響やCGを使った映像、派手なくらいの振動だけでなく、寒い所の場面では冷気が流れ、森林の場面では香りが流れていた（あの香りの成分が、私としては気になった）のが特徴と言えるだろう。

それから、大阪市役所環境保健局技術監の増田喬史さんのお話を伺った。古くから大気汚染や地盤沈下などの公害が多かった大阪には、緑が少ないと言われる（公園・緑地の面積を増やすべく当局も努力していることも話題になった）。しかし、その割には淀川河川敷など残った自然を利用して自然観察会を開いたり、市民ボランティアと環境マップを作ったりと、努力していると思う。市民や事業所が主体的に行動するために必要な情報提供についても、整備中である。大阪市の環境行政は、主に住民と昼間の勤め人が照準を当てているようだ。所謂「タテ割り行政」を越えた部署間の連携できるシステム作りや、いかにして市民参画を進めていくかなどが、今後の課題という。「私は職員にこう言っている。「あなたたちには3つの立場がある。行政としてまちづくりに携わる立場、大阪市という大きな事業所に勤めている立場、そして生活している一市民であるという立場だ。」という増田さんの言葉を、私は忘れない。

第 10 回
土・水・空気・生き物を
考える環境保全の集い 自然環境を考える近畿連絡会

日時 1998年 2月14日(土曜日) 午後 1:00 ~ 5:00
 場所 クオレ大阪西(大阪市此花区西九条 6丁目1-20 ☎ 06-460-7800)
 (JR環状線/阪神「西九条駅」下車徒歩 3分 此花スポーツセンター隣)

- 行事 ①記念講演 「これからの環境保全運動の展開」
 森住明弘先生(大阪大学基礎工学部助手、民間工学技術博士)
 <最近ダイオキシンなど環境汚染が大きな問題となっているが、森住先生は永年ゴミ・リサイクル等の環境問題の実践的な研究を行うとともに市民活動を実践され、関西ではこの分野の草分け的存在である。行政やNGOの評価が高い。>
 ②報告 「この10年間、市民の環境保全運動はどこまで進んだか」
 <これまでの会合の発言者を中心に、各地の運動の状況について報告を受ける。>

ネットワーク

連絡先 大阪自然環境保全協会
 大阪市北区豊崎2-4-5 岸本ビル 2階
 TEL 06-374-3376 FAX 06-374-0608

環境入門夜間講座

昼間忙しい人のために、環境問題について学ぶ夜間講座を開きます。大阪市立環境学習センター「地球環境コーナー」の展示をもとにした、分かりやすい講座です。

- 日 時 1月27日(火)~1月30日(金) 各日とも 18:30~20:00
- 場 所 大阪市立環境学習センター 別館2階・研修室
- 定 員 30名
- 申込法 往復ハガキに、住所、氏名、年齢、電話番号を記入の上、「大阪市立環境学習センター」1月講座係あてにお送り下さい。
- 申込締切 1月15日(祝) 当日消印有効

日 時	講 題	講 師
1月27日(火) 18:30~20:00	地球環境問題概要について	大阪市立環境 学習センター 職員
1月28日(水) 18:30~20:00	大気汚染と地球温暖化について	
1月29日(木) 18:30~20:00	緑の破壊と海洋汚染について	
1月30日(金) 18:30~20:00	省エネ、省資源、リサイクルについて	

4日間すべて受講できる方に限ります。

1996年度会計報告

<収入の部>

前年度通信費繰り越し	-13,960
1990-1995通信費外繰り越し	63,029※
支部会費・購読料	372,500
利息	71
事業協力謝礼	50,000
支部研究大会会費	35,000
ニュースレターバックナンバー売上げ	300

合 計 506,940

<支出の部>

ニュースレター作成発送費	228,120
ワークショップ案内発送費	46,850
事務用品	34,452
諸連絡費	10,800
支部大会・協力事業経費	55,870
支部大会資料送料	7,200
次年度繰越	123,648

合 計 506,940

※1995年度まではニュースレター通信費としての会計報告をしてきましたが、1996年度からは規約により会費制となりましたので、通信費外の収入の繰り越を計上いたします。

日本環境教育学会第9回大会（大阪）のご案内

1. 大会会場 〒582-0026 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1
大阪教育大学柏原キャンパス
(近鉄大阪線 大阪教育大前駅下車)

2. 大会日程 1998年5月22日(金)～5月24日(日)

5月22日(金) 13:00～ フィールドワークショップ(詳細は未定)

5月23日(土) 9:30～10:00 受付

10:00～12:00 一般講演

12:00～13:00 昼食

13:00～16:20 一般講演

16:30～17:30 総会

17:30～18:00 移動

18:00～20:00 懇親会

5月24日(日) 9:30～10:00 受付

10:00～12:00 一般講演・特別企画講演・自由集会

ミニシンポジウム・ミニワークショップ

12:00～13:00 昼食

13:00～14:20 講演(詳細は未定)

14:20～14:30 休憩・準備

14:30～16:00 シンポジウム(詳細は未定)

② 学会員でない大会で発表は
ませんので、非会員で発表を希望
される方は事務局に問い合わせ
てください

わつとわーく

一般講演・特別企画講演申込書(白色の紙)のㄇ切 1998年2月28日(消印有効)

特別企画講演のテーマ 「現在の環境教育に欠けているもの」

一般講演・特別企画講演申込書(白色の紙)のㄇ切 1998年2月28日(消印有効)

ポスター展示申込書(ピンク色の紙)のㄇ切 1998年2月28日(消印有効)

ポスター展示要旨原稿のㄇ切 1998年3月31日(消印有効)

講演要旨原稿のㄇ切 1998年3月31日(消印有効)

関西ECOMAIL

第42号 1997年1月12日発行

編集 日本環境教育学会 関西支部 世話人会 広報委員会

発行 日本環境教育学会 関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室(鈴木善次研究室)気付

〒582 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1

(TEL) 0729-78-3381 [直通]

第43号は 1997年3月7日発行予定 原稿必着期限2月28日

E-mail: m979344@ikoma.cc.osaka-kyoiku.ac.jp(第43号に限る)